

東日本に届け、愛のつぶて『サラサとルルジ』の公演

実行委員長 科学哲学者・金子務

ミュージカル『サラサとルルジ』全 4 幕がいよいよ地元神奈川で上演されます。原作者の詩人・佐々木淑子さんは、このミュージカルのための脚本を、みずから、感性豊かな言葉で綴りました。出演者は公募から選ばれた老若男女です。舞台は天上と地上にまたがる、いかにも賢治童話を思わせる壮大なものです。藤村記一郎さん作曲、安藤由布樹さん指導の歌声がピアノとバイオリン、シンセサイザーに響きあい、合田直美さん指導のダンスと合わせて、演出家の郷田ほづみさんが感動的なお芝居に仕上げました。

水惑星・地球を生むきっかけになった見回り天使サラサが、ふたたび地球報告の旅に。おしりから落ちた緑の森で、豊かな生きものたちと天使に似たニンゲンに出会います。水と生命をグウゼン（偶然）の積み重ねで生んだ地球上では、愛と憎しみの交錯する戦争がつづき、つぎに落下した広島で、サラサは原爆に巻き込まれる。笑いと溜息、決意と愛。最後にはいのちのよろこびが、大災害も生々しい東日本の地まで響けと歌い上げられます。

サラサが兄天使ウラノスから課された「円周率 の問い」は、みなさまへの問いでもあります。割り切れない の話は、グウゼンの積み重ねからヒツゼンを生む奇蹟と、奇蹟の産物であるいのちを貫く愛の話につながっていきます。アインシュタインは、この世界で一番の謎は、「この美しい宇宙の仕組みがニンゲンにわかるということです」、といいました。「なぜニンゲンにはその美しさがわかるのだろうか、それが謎だ」、といいました。グウゼンの産物であるニンゲンが、ヒツゼンと思われる宇宙の仕組みが理解できるのは、おそらく永遠の謎です。だから奇蹟なのです。しかしこの奇蹟、この美しい宇宙の仕組みを破壊し尽くしたのが核爆発でした。ホロビの科学は、アインシュタインも断固拒否しました。奇蹟を認め、奇蹟を支えるのが、ヨロコビの「いのち」を貫く愛だ、と作者は訴えます。

妹天使ルルジの「赤い宇宙花」、ウラノス兄さんの「心を運ぶつぶて（礫）」も、愛の結晶として、東日本の被災者の心にまで届くでしょう。この上演は、たくさんの個人や団体の愛の後援や協力によって実現したものです。関係者一同、心より深く感謝申し上げます。